

日本語教育におけるカタカナ語指導の課題： 教科書分析の観点から

小木曾 左枝子 *

Issues in Katakana Word Instruction in Japanese Language Education: From the Perspective of Textbook Analysis

Saeko OGISO

This paper examines issues in katakana word instruction in Japanese language education from the perspective of textbook analysis. Over recent years, the number of katakana loanwords has continued to increase, substantially shifting the Japanese lexicon and demanding reconsideration of vocabulary instruction for learners of Japanese. Although prior research has highlighted the need to address issues related to the teaching of katakana words, instruction in this area has not been systematically integrated into vocabulary teaching. Accordingly, this paper reviews previous studies on katakana word instruction and textbook analyses of katakana words to reassess how katakana should be considered within Japanese vocabulary instruction. By examining what instructional support is needed in classroom contexts, it argues that supplementary explanations and other pedagogical strategies can enhance learners' understanding of katakana words in areas where textbook support is limited.

キーワード：外来語、カタカナ語、日本語教育、教科書分析、語彙指導

Keywords: loanwords, katakana words, Japanese language education, textbook analysis, vocabulary instruction

I. はじめに：研究の背景と目的

近年、日本語において外来語や外国語などのカタカナ語の使用は拡大傾向を示し、その状況は「外

* 立命館大学グローバル教養学部 准教授

sogiso@fc.ritsumei.ac.jp

Received on 2025/11/4, accepted after peer reviews on 2026/8/6

来語の氾濫」や「外来語の多用・氾用」（金 2024; 塩田 2022a）といった表現で懸念されている。これは、新しい外来語が次々に登場し、「なじみのない新語が激増」（金 2016: 13 頁）していることが「氾濫」を感じさせる要因だと考えられる。文化庁が 2018 年に実施した「国語に関する世論調査」では、「外来語や外国語などのカタカナ語の意味が分からずに困ることがあるか」の問いに、回答者である全国 16 歳以上の男女の 8 割以上が「ある」と答えている（文化庁 2018）。

一方で、すべての外来語が一様に理解しにくいわけではない。国立国語研究所の外来語使用実態調査（田中・久屋・相澤 2024）では、認知率や理解率に経年的な変化がみられる語もある。ここでいう認知率とは、その外来語を「見聞きしたことがある」と回答した人の比率を指す。一方、理解率とは、その外来語が対応する既存語、すなわち同義性の高い日本語の語と同じ意味で使われることを知っている人と回答した人の比率を指す。例えば、「スキル」という語は、2002～2004 年度の調査では認知率が 45.2%、理解率が 28.0%であったが、2023 年の調査ではそれぞれ 93.9%、86.9%にまで上昇している。このように、過去には一般に理解しにくいとされていた外来語であっても、時間の経過とともに広く認知・理解されるようになる場合もある。

同様の傾向は、他の調査からもうかがえる。「日本語のゆれに関する調査」（塩田 2022b）によると、「ハザードマップ」や「インフラ」などの語が、一般成人の 8 割以上に理解されている。これらの語については、国立国語研究所「外来語」委員会がまとめた『『外来語』言い換え提案』（2006）において、「ハザードマップ」には「災害予測地図・防災地図」、「インフラ」には「社会基盤」といった「言い換え語」が提案されていた。かつて理解しにくい語として言い換えるの対象となった語が、現在では広く理解されていることから、外来語が社会の中に広く定着していることがわかる。外来語は、かつての「かっこいい」という印象も薄れ、プラスやマイナスのイメージを伴わない「ふつうのことば」として受け止められ、「在来語化」しているのである（塩田 2022a）。

このような傾向を反映して、外来語の中には既に日本語として定着し、「基本語彙」に入り込んでいる語も増えている（金 2012a, 2012b, 2016, 2024）。基本語彙とは、日常生活で高頻度かつ広範囲に使用される語群を指し、そうした語群に新たに加わる現象が「基本語化」と呼ばれる。外来語の基本語彙への進出は、国語辞典における外来語の語数からも確認できる。茂木（2019）は、時代の異なる国語辞典における外来語の収録状況を示す例として、1891 年の『言海』では外来語の割合が 1.4%にすぎなかったが、2011 年の『新選国語辞典』では 9%にまで増加していることを指摘している。

基本語化したと考えられる外来語は、「スキー」「ホテル」「テレビ」のような具体名詞が多いと言われているが、抽象的な意味をもつ外来語も基本語彙に進出している点は注視すべきである。「抽象的な事柄を表す外来語の基本語化」については、金（2006, 2016, 2024）が「トラブル」「ケース」「チェック」などを事例に、その要因を詳細に分析している。1960 年ごろから新聞で使われるようになった「トラブル」を例に挙げると、この語は意味用法を拡大させ、和語や漢語など 20 以上の類義語の上位語に位置するようになった。それは、「トラブル」が「《不正常な事態》を『広く』『概略的に』表すことができる、それまでの新聞語彙にはなかった『便利』な単語として成立している」（金 2016: 15 頁）からである。この事例からは、「トラブル」のような外来語が、和語や漢語の複数の類義語が担っていた意味領域を広く概略的に表す語として用いられることで、利便性が高い語として認識され、使用範囲を広げてきたことがうかがえる。こうした使用範囲の拡大は、抽象的な事柄を表す外来語が基本語彙に進出していく過程を示すものだと言える。

以上のように、外来語は量的にも質的にも日本語の語彙体系に大きな変化をもたらしている。この

ような変化を十分に踏まえたうえで、日本語を外国語や第二言語として学ぶ学習者への語彙指導を考える必要がある。しかしながら、日本語教育分野では、後述する望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表1）に示されるように、外来語を教える際に考慮すべき点がこれまでも指摘されてきたものの、具体的な教育実践としては十分に発展していないのが現状である。本稿では、教育実践を見直すための基礎的検討として、授業で広く活用され、学習の中核を担う日本語学習者向けの総合教科書に焦点を当て、カタカナ語指導に関する先行研究を概観するとともに、教科書分析の先行研究で示された分析結果を整理する。さらに、教科書におけるカタカナ語の扱われ方を指導の観点から捉え直し、授業においてどのような補足説明や指導上の配慮が求められるのかを検討する。

II. 先行研究：カタカナ語に対する学習者の意識・学習上の困難・教育現場での指導実態

1. カタカナ語に関する用語と定義

入門期の日本語教育では、文字としてのカタカナの習得と並行して、カタカナで表記される語の学習も進められる。このようなカタカナ表記語は外来語に限られないため、まず用語を整理しておく。「外来語」という用語は、広義には他言語からの借用語全般を指し、漢語も含む。しかし、日本語学や日本語教育における研究書では、漢語を除く、主にヨーロッパ言語に由来する狭義の外来語を「外来語」と呼ぶ場合が多い。本稿でも、漢語以外の借用語を「外来語」として扱う。また、「外来語」と「外国語」が併記される用例もある。その背景には、表記や発音、定着度などの多様な問題が関わっており、両者の区別が難しいことが指摘されている（中山 2015）。さらに、「日本人による独自の造語」と定義される和製英語を含む「和製外来語」（陳 2011: 124 頁）の存在もある。

このように、「外来語」という用語は、その範囲や定義に一定の幅があり、辞典類の書名には「カタカナ語辞典」と題するものが多い。阿久津（2015: 21-22 頁）は、「カタカナ語」という呼称が使用される理由について、『カタカナで表記される語』という外見的な特徴を示してわかりやすいからだと説明している。あわせて、カタカナで表記される外国語のほか、和製外来語など、狭義の「外来語」に該当するか、判断が分かれるものも扱える点で、「カタカナ語」という呼称には便利さがあると指摘している。こうした「カタカナ語」という呼称の使用範囲の広がりに関わる点として、カタカナ表記が外来語や外国語のみならず、擬声語・擬態語、動植物名、学術専門用語などの「非外来語」に用いられることも挙げられる。

以上を踏まえ、本稿では、カタカナで表記される語を広く指す用語として「カタカナ語」を用いることを基本とする。したがって、本稿における「カタカナ語」には、外来語、外国語、和製外来語に加え、非外来語のカタカナ表記も含まれる。ただし、漢語以外の他言語からの借用語であることに焦点を当てて場合には「外来語」、外来語以外のカタカナ表記に焦点を当てて場合には「非外来語のカタカナ表記」を用いる。また、先行研究を引用する際には、各文献で使用されている用語をそのまま採用する。

2. カタカナ語に対する日本語学習者の意識

第I章で述べたとおり、外来語は社会の変化にともない変わり続けている。こうした状況のもとで、外来語を含むカタカナ語の認知や習得が日本語学習者にとって難しいことが指摘されている（池谷・久津木 2014; 上野山 2010; 戸川 2018; 李 2020）。学習者が感じるカタカナ語の難しさを示す資料として、日本語学習者を対象に実施された意識調査がある（邱・才田 2019; 田島・金 2011; 陣内 2008; 中

山他 2008; 望月 2012)。その中で、陣内（2008）が報告している全国規模の調査は、実施から約 20 年が経過しているものの、日本語学習者のカタカナ語学習に関する一般的な傾向を示すものとして、今日でも多くの文献で引用されている。同調査は、日本全国の 198 の日本語教育機関に依頼して実施され、そのうち 58 機関から、計 479 名の学習者の回答が得られたものである。回答者の母語別内訳は、中国語 49.7%、韓国語・朝鮮語 23.2%、英語 4.2%、その他 22.8%、無回答 0.2%であった。また、日本語学習期間別では、1 年未満が 37.8%、1 年以上 2 年未満が 33.0%、2 年以上 3 年未満が 14.0%、3 年以上 4 年未満が 7.1%、4 年以上 5 年未満が 3.1%、5 年以上が 2.3%であり、2 年未満の学習者が全体の 7 割を超えていた（陣内 2008: 49 頁）。このことから、同調査は、比較的学习期間の短い漢字圏学習者を多く含む調査であったと言える。

まず、カタカナ文字の学習についてみると、書くことが「とても難しい」「難しい」「少し難しい」と回答した学習者は全体の 69.2%を占め、特に学習歴 1 年未満の学習者では「とても難しい」「難しい」の回答は 37.2%に上る（陣内 2008: 50 頁）。読むことについても同様に、カタカナ文字の定着が容易でないことを示している。文字習得の難しさは、語彙理解の困難にも直結している。「日常生活の中で、カタカナ語が分からず困ったことはどれぐらいありますか」という質問に対して、「ある」「よくある」「ときどきある」と回答した学習者が合わせて 77.8%に達している（陣内 2008: 51 頁）。この結果は、カタカナ語が日本語学習者のコミュニケーション上の障害となり得ることを示唆し、その指導の重要性を裏づけている。

具体的な困難点としては、学習者の半数が「発音の違い」「意味推測不能」「辞書不掲載」「表記の困難さ」などを「難しい」と回答している。背景には、外来語の多くが英語など欧米言語に由来していることがあり、「発音の違い」が大きな壁となり、それが「表記の困難さ」にもつながっている（陣内 2008: 52 頁）。これらの点は、後述の望月（2012）が指摘する困難点と重なる。

また、こうした困難点に関連して、授業でのカタカナ語指導を求める学習者も多く、「もっときちんと教えてほしい」と回答した学習者は全体の 59.3%を占めている（陣内 2008: 54 頁）。さらに、同研究の分析によると、カタカナ語に最も苦手意識を持つ中国語母語話者においては、英語学習歴の短い学習者ほど指導への要望が高い傾向がみられる。一方で、英語学習歴が長い学習者（10 年以上）でも半数以上が同様に回答している（陣内 2008: 57-58 頁）。これらの結果から、カタカナ語の体系的な指導を望む声は、学習者の母語や英語の知識にかかわらず強いと言える。

3. 日本語学習者にとってのカタカナ語学習上の困難点

前節で確認した学習者のカタカナ語に対する意識を踏まえ、本節では、学習上の困難点を教育的視点から整理した望月（2012）の研究を中心に検討する。望月は、カタカナ外来語の学習上の困難点を 9 項目に分類している。以下の表 1 は、望月（2012）の分類をもとに、その困難点と困難を感じる原因を整理したものである。

表 1 望月（2012）における「カタカナ外来語の学習上の困難点」

	困難点	困難を感じる原因
①	発音のズレ	外国語を日本語の音韻体系に従いカタカナ語化するには、CV パターン（子音+母音の開音節）化や母音の収斂が起こり、原音との差が生じる。
②	表記のゆれ	原則と慣用の間にゆれが生じ、複数の表記が併存する。

③	意味のズレ	意味範囲の拡大・縮小、原語にない派生的用法によって、推測が困難となる。
④	和製英語	和製英語、英語由来の外来語、外来語化されていない英語との区別が難しい。
⑤	縮約語または短縮語	長い単語や複合語が省略され、原語や意味の推測が難しい。
⑥	混種語	「和語+外来語」や「外来語+和語」で構成される混種語があり、学習者にとって難しい語もある。
⑦	動詞化・ナ形容詞化	名詞の形で借用される外来語が多い一方で、「する」や「る」を付けて動詞化されたり、「な」を付けてナ形容詞化されたりすることがある。
⑧	非外来語のカタカナ表記	外来語以外にも、擬音語・擬態語、外国製日本語、感動詞、ふりがな、機関・施設名、難読漢字語などでカタカナ表記が用いられる。
⑨	和語・漢語・外来語の類語	基本語化した外来語と既存語の使い分けが明確ではなく、共起語との関連性などの情報が辞書に掲載されていない。

望月（2012: 8-10 頁）をもとに筆者が要約して作成。

①～⑧は従来から指摘されてきた困難点であるが、⑨は望月による新たな視点である。外来語が基本語彙へと進出することで、既存の和語や漢語との間に意味的重なりが生じ、使い分けが一層複雑化している点を示している。

この研究は、学習者の理解と使用に影響する困難点と、その原因を体系的に整理した点で意義深い。これらの困難点は、単に学習者のカタカナ語に関する知識不足によるものではなく、教材や指導内容、使用環境とも密接に関係しており、教育現場におけるカタカナ語の指導を見直す必要性を示唆している。次節では、教師の意識を含め、日本語教育におけるカタカナ語指導の現状を先行研究から整理する。

4. 日本語教育の現場におけるカタカナ語指導

前節で述べたように、カタカナ語の習得には困難が伴うことが指摘されている（陣内 2008; 中山 2012; 中山他 2008; 堀切 2008, 2016）。このような学習上の困難は、教育現場での扱いとも密接に関係している。カタカナ語指導に関する全国規模の調査として、科学研究費補助金基盤研究（C）「カタカナ教育の基礎研究—日本語教育における分野の確立を目指して—」（中山 2006）による一連の研究が挙げられる。本章第2節で示した学習者の意識調査（陣内 2008）も、このプロジェクトの成果の一部である。この学習者調査と同時に実施された日本語教育機関および教師を対象とした調査では、調査を依頼した 198 機関のうち 58 機関から機関用調査の回答を得るとともに、教師用調査では計 211 名の教師から回答を得て、教育現場におけるカタカナ語指導の実態や課題を報告している（中山他 2008）。

この教師用調査では、「カタカナ語をどのように教えていますか」という複数回答可の質問に対して、「普段使っている教材に出てきたら、和語・漢語と同様に教えている」と回答した教師が 72.0% と最も多かった。一方で、「カタカナ語彙専用教材は使っておらず、普段使っている教材に出てきても、和語・漢語ほどにはていねいに教えていない」と回答した教師も 14.2% いた（中山他 2008: 87-88 頁）。この結果から、カタカナ語は、専用教材などによって体系的に扱われるというよりも、授業で普段使用されている教材に登場した際に扱われる傾向が強いことがうかがえる。また、一部では、和語・漢語ほどていねいに扱われていない場合があることも示されている。文字としてのカタカナ指導についても、ひらがなと比べると十分な定着が図られていないことが指摘されている。教師の多くは、カタカナ語指導について、学習者の負担や定着の難しさ、教材上の課題を認識はしているものの、十分な時間を割くことができない、また、他の指導項目に比べて優先順位が低いといった理由から、体系的な指導には至っていないことが報告されている。

また、「カタカナ語を教える際にどのような点に注意すべきだと思いますか」という複数回答可の質問に対しては、「原語とのずれ」を挙げた教師が 80.1%と最も多かったのに対し、「日本語の語彙であるという意識」を挙げた教師は 45.5%であった。さらに、語彙指導において重要な「カタカナ語と類義の和語・漢語の存在」を意識している教師は 27.5%であった（中山他 2008: 88 頁）。中山他は、こうした教師用調査の結果を踏まえ、カタカナ語を日本語の語彙として扱うことが教師の指導意識に十分に浸透していないことを指摘している。

日本語教育では、カタカナ語教育が「ないがしろにされている」（飯田 2016: 161 頁）といった批判もみられる。中山他（2008）の調査が実施されてから約 20 年が経過しているが、授業時間に制約がある中で語彙指導に十分な時間を確保することは難しく、カタカナ語指導に特化した活動を継続的に授業に組み込むことは、依然として容易ではない。しかしながら、授業内に限らず、学習者が教室外で未知のカタカナ語に遭遇した際、その語の意味を推測し、理解や使用へとつなげる力を育成するための支援は、語彙教育の一環として極めて重要である。カタカナ語の増加や複雑化が進む現代において、入門期のカタカナ文字指導の枠を超え、語彙教育の中にカタカナ語指導を体系的に位置づけることが求められる。

III. 教科書に出現するカタカナ語の傾向

1. 本章の目的と位置づけ

前章では、カタカナ語指導に関する先行研究を整理し、語彙教育として体系的なカタカナ語指導が不十分なことを指摘した。また、学習者が教室外で未知のカタカナ語に遭遇した際、その意味を推測し、理解・使用へとつなげるストラテジーの必要性にも言及した。こうした学習者のカタカナ語学習を支える主要教材として、最も頻繁に使用されるのが教科書である。前章で示した先行研究の調査結果にもあるように、教育現場でカタカナ語を教える場面の多くは、教科書に登場した際である。したがって、どのようなカタカナ語が、どの段階で、どのように提示されているかを把握することは、効果的な語彙指導を検討するうえで不可欠である。

本章では、先行研究で示された教科書分析の結果をもとに、初級から上級までの総合教科書におけるカタカナ語の出現傾向を整理する。教科書は、語彙導入や運用練習の中核となる教材であり、その分析結果を検討することは、現状の課題を把握し、指導上の留意点を考えるうえでも重要な手がかりとなる。教科書におけるカタカナ語の扱いを検討するにあたって、まず先行研究の視点と方法を整理しておく。

カタカナ語に関する教科書分析研究は、その対象と方法により大きく二つに分類できる。一つは、初級から上級までの多数の教科書を対象に、索引・本文・教科書全体のカタカナ語出現率をレベル別に比較する研究である（中山他 2008; プラワン 2023）。中山（2001）もこのタイプに含まれるが、新聞にみられる外来語との比較を通して分析しており、分析の枠組みはやや異なる。もう一つは、特定レベル（初級・中級・上級）の教科書群に焦点を当て、複数冊を選定し、出現するカタカナ語を分析する研究である（稲垣 1991; 菅生 2002; 山崎 2000）。稲垣（1991）と菅生（2002）は初級、山崎（2000）は中・上級を対象とし、山崎は当時の日本語能力試験の出題基準との比較を行っている。また、所属機関や担当クラスで使用する教科書を分析し、教育実践の観点から指導法を考察した研究（小野 2011; 工藤 2001）もある。

こうした調査研究は多くはないものの、いずれも教科書におけるカタカナ語の量的・質的傾向を示し、語彙教育の一環としてカタカナ語指導を検討するうえで基礎的資料となる。近年の教科書の改訂や出版状況を踏まえ、改訂版や新刊を中心に出現傾向を検討した研究もみられる（小木曾 2023）¹。本章では、こうした近年の動向も参照しつつ、各レベルの教科書分析から指導上の課題を検討する。まずカタカナ語の全体的な出現傾向を概観し、続いて初級・中級・上級それぞれのレベルにおける特徴を整理したうえで、教育実践への示唆を考察する。

2. 教科書に出現するカタカナ語の全体的な傾向

初級から上級までの各レベルにおけるカタカナ語の出現傾向を把握することは、指導を検討するうえで重要である。本節では、索引を対象とした中山他（2008）および教科書全体を対象としたプラワン（2023）を参照して出現率の傾向を確認する。

中山他（2008）は、教科書の索引に掲載された語全体に占めるカタカナ語の割合を、レベル別に示している。ただし、同論文では、教科書別の索引掲載語数およびカタカナ語数は示されておらず、索引語の抽出基準が一定ではない部分もあるため、この数値は本来の異なり語数の出現率とは若干異なると説明されている。そのため、個々の教科書における厳密な出現率を示すものではないが、複数レベルにわたる計 60 冊の教科書を対象としている点で、レベル別の大まかな傾向を把握するための手がかりとはなる。表 2 は、中山他（2008）が示した各レベルの対象冊数と、カタカナ語出現率の平均値を整理したものである。表 2 に示すように、出現率は初級で最も高く、レベルが上がるにつれて低下する傾向がみられる。

表 2 レベル別にみた教科書索引のカタカナ語出現率

レベル	初級	初中級	中級	中上級	上級
教科書の冊数	29 冊	7 冊	13 冊	8 冊	3 冊
カタカナ語出現率 (索引掲載語全体に占める割合の平均値)	11.9%	11.3%	8.6%	6.3%	6.3%

中山他（2008: 89 頁）の記述をもとに筆者が作成。出現率は、各レベルの教科書索引に掲載された語全体に占めるカタカナ語の割合の平均値を示す。

プラワン（2023）は、1979～2020 年に出版された計 85 冊を対象に、教科書全体から固有名詞を除外してカタカナ語を抽出し、延べ語数・異なり語数・出現率を分析している。同論文では、85 冊の総延べ語数は 387,743 語、異なり語数は 25,221 語であり、そのうちカタカナ語は延べ 17,406 語（4.49%）、異なり語数は 1,839 語（7.29%）であった（プラワン 2023: 118-119 頁）。さらに、レベル別・教科書別に分析しており、表 3 は、そのうちレベル別のカタカナ語の異なり語数、出現率および一語当たりの使用度数を示したものである。

1 これに加え、小木曾は 2022 年の『ボズナン＆クラクフ日本学専攻科設立 35 周年記念学会』での口頭発表「中級日本語学習者へのカタカナ語の指導」、2024 年の『第 26 回英国日本語教育学会年次大会』でのポスター発表「上級日本語学習者にとってのカタカナ語学習：教科書のカタカナ語分析から」においても同様の研究を行った。また、小木曾は 2022 年の『第 24 回英国日本語教育学会年次大会』において柏木美和子氏との共同発表「中級日本語教科書における単語リストの英語対訳の役割：カタカナ語の分析」でも同様の研究を行った。

表3 日本語教科書のレベル別、カタカナ語の異なり語数、出現率、及び一語当たりの使用度数

教科書 レベル	(冊)	カタカナ語の 異なり語数	カタカナ語異なりの出現率(%)				一語当たりの 使用度数平均値
			平均値	最大値	最小値	標準偏差	
初級	33	867	6.44	12.10	2.00	1.89	2.44
初中級	14	568	5.39	7.32	3.97	0.86	1.98
中級	31	1,267	4.26	7.75	1.18	1.70	2.04
上級	7	605	4.77	6.15	3.71	0.96	1.88

プラワン（2023: 119 頁）の表1を原表のまま再掲。

表3に示すように、カタカナ語の異なり語数は中級が1,267語と最も多い。ただし、この値は各レベルの対象冊数の影響を受けるため、レベル間の傾向を比較する際には、各教科書におけるカタカナ語異なり出現率の平均値をあわせて見る必要がある。出現率の平均値では、初級が6.44%と最も高く、次いで初中級が5.39%、上級が4.77%、中級が4.26%である。このことから、異なり語数の総数では中級が最も多いものの、出現率で見ると、初級教科書においてカタカナ語の割合が相対的に高いことがわかる。

中山他（2008）およびプラワン（2023）の両研究は、分析範囲が異なるものの、いずれも初級レベルでカタカナ語の出現率が最も高いことを示している。プラワン（2023）は、教科書の構成や場面により差が生じ、特に日常生活の場面で出現率が高い傾向があると分析している。このことは、初級で日常生活に必要な日本語を中心に学習するという目的を考えると、整合性がある結果だと言える。

教科書で扱われる外来語が新聞で頻繁に使用される外来語をどの程度含んでいるかを検討した研究として、中山（2001）は教科書18冊（初級8冊・中級5冊・上級5冊）から固有名詞を除いた外来語数を算出し、新聞で頻繁に使用される外来語との重なりを分析している。その結果、上級レベルまで進んでも教科書で学べる外来語は平均385語で、そのうち新聞多用外来語357語と重なるのは平均126語で、約3分の1しかないことを報告している。さらに、新聞多用外来語のうち教科書で学習できる可能性が極めて低い語が151語（約42%）に上ることから、教科書語彙の範囲が新聞における実際の使用と比べて限定的であり、それが学習者の苦手意識の一因となっていると指摘している。

3. 初級総合教科書に出現するカタカナ語の特徴

前節では、初級から上級までの教科書におけるカタカナ語の全体的な出現傾向を確認し、カタカナ語の出現率は初級で最も高く、レベルが上がるにつれて低下する傾向があることを示した。ただし、初級レベルでの出現率が高いからといって初級のカタカナ語学習が最も困難だとは言えない。本節では、先行研究の視点を概観しつつ、頻出するカタカナ語を取り上げたうえで、第II章第3節で示した望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表1）を参照しながら、学習者にとっての困難点を検討する。

初級教科書における外来語の分析研究は多くはないが、複数みられる。稲垣（1991）は、外来語の意味理解を妨げる要因として原語の意味とのずれに着目し、初級教科書にみられる外来語の意味的特徴を検討している。19種類の教科書から外来語を抽出し、意味分野を「抽象的關係」「人間活動の主体」「人間活動」「生産物」「自然」の5分野に分類して分析している。その結果、「セーター」「テレビ」「ピ

アノ」など、「生産物」を中心とする「モノ」を表す外来語が多くの初級教科書に共通して見られた。稲垣は、学習者が困難を感じる要因として発音・表記・語形・意味の相乗作用を指摘している。しかし、初級教科書で共通して扱われる外来語には、具体的な「モノ」を表す語が多いことから、そこで扱われる外来語の多くは、意味の面では比較的理解しやすいと考察している。

一方、菅生（2002）は、「キャンセルする」「スマートな」「クールに」のように動詞化・形容詞化・副詞化された語など、外来語の「語形の日本語化」に着目している。初級教科書5冊を対象に、出現する外来語を「動詞化」「形容詞化」「副詞化」「形態素の省略あり」「形態素の省略なし」「単語の前半省略」「単語の後半省略」「複合語の省略」「混種語」「和製外来語」「原語が英語以外」の計11項目に分類している。その結果、「副詞化」を除くすべての「語形の日本語化」に該当する語が全教科書に確認されたが、これらの語について十分な説明がなく、教科書が支援的役割を果たしていないことを指摘している。

稲垣（1991）の意味分野に焦点を当てた分類、菅生（2002）の文法的視点からの分類は、初級教科書におけるカタカナ語の特徴を多面的に示している。一方、小木曾（2023）は、田中（2016a）に示された初級総合教科書の語彙シラバス研究を参照し、同研究に関連して公開されている教科書掲載語データ（田中 2016b）を用いて、初級教科書に出現するカタカナ語の全体的傾向を分析し、学習上の課題を検討している。このデータを用いた小木曾（2023）の分析では、戦後発行された初級総合教科書21種34冊から抽出されたカタカナ語は異なり語数で875語であり、そのうち、21種の教科書の過半数にあたる11種以上に出現するカタカナ語は53語（約6%）であった。これらは、複数の初級教科書に共通して出現する高頻度語と言える。表4は、小木曾（2023）が掲載教科書数の多い順に示した53語を再掲したものである。

表4 初級教科書21種の過半数（11種）に出現するカタカナ語

掲載教科書数	カタカナ語
20	バス
19	テニス
18	アメリカ コーヒー デパート ラジオ
17	テレビ パン ピアノ フランス
16	シャツ スポーツ ノート
15	コップ セーター ナイフ ビール
14	スキー ズボン タクシー テープ ドイツ ニュース ネクタイ ホテル
13	アパート カメラ クラス ジュース タイ ドア パーティー ボールペン メートル
12	カタカナ コンピューター スーパー テーブル ベッド レストラン
11	インド インドネシア ケーキ チョコレート テープレコーダー バナナ ビル プレゼント ペン ボタン ミルク レポート

小木曾（2023: 101 頁）の表2を原表のまま再掲。

表4の高頻度語は、「バス」「テニス」「コーヒー」「ピアノ」など、日常生活に密着した基本語彙（国立国語研究所 1984）である。これは、稲垣（1991）の初級教科書では「生産物／モノ」が中心だとする分析とも一致する。また、「テープレコーダー」「テープ（カセットテープの短縮語）」など、改訂版や新刊の教科書から姿を消している語も含まれており、時代にもなう変化が速いカタカナ語の

特徴が垣間見られる。

小木曾（2023）は、この高頻度語 53 語について、望月（2012）が整理した「カタカナ外来語の学習上の困難点」9 項目（表 1）を参照しながら、初級教科書でこれらの語を扱う際に教師が留意すべき点を検討している。その結果、高頻度語 53 語には、原語と日本語の間で音のずれが生じやすい語や、語形が短縮された語が含まれていることから、①「発音のズレ」と⑤「縮約語または短縮語」に注意が必要であると指摘している。「発音のズレ」に関しては、学習入門期の発音・アクセントの習得とあわせて最も注意すべき点だと強調している。また、学習者の母語や既習言語を考慮し、英語以外の言語に由来する語（「パン（ポルトガル語）」「コップ（オランダ語）」や、初級教科書の比較的早い段階で出現する国名（「ドイツ」「イギリス」）など、「発音のズレ」が大きい語に注意が必要だと述べている。さらに、表 4 には「デパート」「テレビ」「スーパー」「ビル」などの「短縮語」が多く含まれていることにも注目し、初級段階では、①「発音のズレ」および⑤「縮約語または短縮語」の 2 点に特に注意が必要だと指摘している。

加えて、語尾に長音符号が含まれるか否かでゆれる「コンピュータ（ー）」、英語の report とは意味範囲が異なる「レポート」、「牛乳」との区別が必要な「ミルク」、英語の note と意味が異なる「ノート」なども高頻度語に入っていることから、初級段階でカタカナ語を扱う際には、教師が②「表記のゆれ」、③「意味のズレ」、④「和製英語」に関わる点についても、学習者に補足説明を行うなど指導上の配慮が必要だと述べている。また、菅生（2002）の「動詞化」「形容詞化」は、望月（2012）の⑦「動詞化・ナ形容詞化」に相当するが、表 4 には該当するカタカナ語がない。ただし、初級教科書には「ホームステイする」などの動詞化されたカタカナ語が登場することがある。そのため、⑦「動詞化・ナ形容詞化」は高頻度語 53 語には現れないものの、初級教科書に出現するカタカナ語全体を考える際には、動詞化された語の扱いにも留意する必要がある。小木曾（2023）は、形容詞化された語は教科書によって出現状況が異なり、比較的少ないため、中級以降に注意が必要だとしている。

以上を踏まえると、初級教科書に高頻度で出現するカタカナ語は、日常生活に密着した具体的な語が多く、意味の面では比較的理解しやすいものが中心である一方、発音、表記、語形、原語との意味の違いに関わる困難点を含んでいると言える。したがって、初級段階のカタカナ語指導では、出現頻度の高い語を基本語彙として扱うだけでなく、中級以降のカタカナ語学習に対応できるよう、カタカナ語の発音、表記、語形、意味に関する基礎的な知識を補足しながら指導することが重要である。

4. 中級総合教科書に出現するカタカナ語の特徴

前節では、初級教科書に出現するカタカナ語の傾向を確認し、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表 1）を参照しながら、初級段階では表 1 の①「発音のズレ」および⑤「縮約語または短縮語」を中心に、②「表記のゆれ」③「意味のズレ」④「和製英語」にも留意した指導が求められることを整理した。

中級段階に進むと、教科書に出現するカタカナ語は、使用される場面や語の意味・用法也多岐にわたるようになるため、指導上、考慮すべき点も増える。小木曾は 2022 年の口頭発表において²、初級と比較し、中級以降は表 1 の⑥「混種語」、⑦「動詞化・ナ形容詞化」、⑧「非外来語のカタカナ表記」、⑨「和語・漢語・外来語の類語」を含む①～⑨のすべての困難点を視野に入れた指導が必要だと述べ

2 2022 年の小木曾による口頭発表に関しては、注 1 を参照。

ている。その根拠として、4種6冊の中級教科書（『中級日本語カルテット』Ⅰ・Ⅱ、『みんなの日本語中級』Ⅰ・Ⅱ、『上級へのとびら』、『中級の日本語』）に出現するカタカナ語を分析し、⑥「混種語」、⑦「動詞化・ナ形容詞化」、⑧「非外来語のカタカナ表記」が多くみられること、さらには「速さ」「速度」「スピード」といった⑨「和語・漢語・外来語の類語」の使い分けも必要であることを報告している。

中級教科書のカタカナ語出現率を扱った研究は多くはないが、小木曾（2023）および2022年の小木曾による口頭発表、同じく2022年の小木曾・柏木の口頭発表から³その傾向を読み取ることができる。これらの調査結果をもとに、小木曾・阿久津（2023）は、初級・中級の総合教科書7種12冊について、索引掲載語全体に占めるカタカナ語の割合を示している。表5は、その結果をまとめたものである。

表5 索引掲載語に占める教科書別カタカナ語の出現率

レベル	教科書名	索引掲載語総数	カタカナ語	
			語数	出現率
初級	『初級日本語 げんき』Ⅰ 第3版(2020年発行) 『初級日本語 げんき』Ⅱ 第3版(2020年発行)	1,774	191	10.8%
	『みんなの日本語 初級』Ⅰ 第2版(2012年発行) 『みんなの日本語 初級』Ⅱ 第2版(2013年発行)	1,980	185	9.2%
	『初級日本語とびら』Ⅰ(2021年発行) 『初級日本語とびら』Ⅱ(2022年発行)	1,485	114	7.7%
中級	『中級日本語 カルテット』Ⅰ(2019年発行) 『中級日本語 カルテット』Ⅱ(2020年発行)	1,537	95	6.2%
	『みんなの日本語 中級』Ⅰ(2008年発行) 『みんなの日本語 中級』Ⅱ(2012年発行)	3,340	364	10.9%
	『上級へのとびら』(2009年発行)	1,511	99	6.4%
	『中級の日本語』改訂版(2008年発行)	1,658	107	6.5%

小木曾・阿久津（2023a: 126頁）の表1をもとに、項目名を一部改変して再掲。索引掲載語総数は、各教科書の索引に掲載された和語・漢語・カタカナ語等を含む語の総数を示す。カタカナ語の出現率は、索引掲載語総数に占めるカタカナ語の割合である。

表5を見ると、索引掲載語総数に占めるカタカナ語の出現率は、レベル別の平均では初級が9.2%、中級が7.5%であり、初級教科書のほうが中級教科書より高い傾向がうかがえる。これは、本章第2節で確認した表2の傾向とも一致する。ただし、教科書別に見ると出現率にはばらつきがあり、『みんなの日本語中級』Ⅰ・Ⅱは10.9%と表5の中級教科書では最も高い。したがって、表5からは、レベルが上がるにつれてカタカナ語の割合が一律に低下するとまでは言えない。また、表5は索引掲載語を対象とした比較であり、教科書本文全体におけるカタカナ語の出現状況を示すものではない。そのため、表5の数値は、カタカナ語が教科書内でどの程度語彙項目として取り上げられているかを示す手がかりとして見る必要がある。中級教科書におけるカタカナ語の課題を捉えるには、こうした索引掲載語だけでなく、本文中に出現する索引不掲載のカタカナ語にも目を向ける必要がある。

2022年の小木曾・柏木による発表は⁴、中級教科書では索引不掲載のカタカナ語が多いことを指摘

3 2022年の小木曾による口頭発表及び小木曾・柏木による口頭発表に関しては、注1を参照。

4 2022年の小木曾・柏木による口頭発表に関しては、注1を参照。

している。表5の『みんなの日本語中級』における出現率が高いのは、出現カタカナ語すべてが索引に含まれているためである。一方、『中級日本語カルテット』では、教科書全体に3,668語（異なり語数672語）のカタカナ語が出現している。同教科書では、索引掲載で対訳付きカタカナ語が95語、索引不掲載だが対訳があるカタカナ語が23語、索引不掲載の未習語で対訳がないカタカナ語が440語で全体の66%を占めている（小木曾・阿久津 2023: 127 頁）⁵。このように、中級レベルでは、索引上の出現率だけでは捉えきれないカタカナ語が教科書本文中に多く出現している。特に、索引や語彙リストに掲載されず、対訳も付されていない未習カタカナ語が多い場合、学習者は教科書内の語彙リストや対訳に頼ることができず、文脈や既有知識を用いて意味を類推する必要がある。これらのことから、2022年の小木曾・柏木の発表は、『中級日本語カルテット』に出現するカタカナ語のうち、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表1）の①「発音のズレ」、③「意味のズレ」、④「和製英語」が要因で類推が困難なカタカナ語があることを指摘している。

以上のように、中級教科書におけるカタカナ語の課題は、索引掲載語に占める出現率の高低だけでは捉えられない。中級教科書の教科書本文中には、索引不掲載・対訳なしの未習カタカナ語が多く出現するだけでなく、混種語、動詞化・ナ形容詞化された語、非外来語のカタカナ表記、和語・漢語・外来語の類語などの語も出現する。したがって、中級段階のカタカナ語指導には、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表1）に示された①～⑨のすべての困難点を踏まえた、包括的な語彙教育の視点が求められる。

5. 上級総合教科書に出現するカタカナ語の特徴

前節では、中級教科書に出現するカタカナ語は多岐にわたり、索引不掲載や対訳なしのカタカナ語も増えるため、より包括的な指導が必要であることを確認した。この負担は、上級レベルではさらに増すと考えられるが、出版されている上級教科書数自体が少なく、教科書分析の観点からカタカナ語の出現傾向を検討した研究も限られている。本節では、上級教科書におけるカタカナ語の扱いを、2024年の小木曾の発表⁶における分析結果をもとに整理し、上級段階のカタカナ語学習の特徴と課題を検討する。上級教科書は読解中心の構成が多く、扱うトピックや語彙も教科書ごとに異なる。この発表において小木曾は、近年出版された中でもカタカナ語出現が多い『日本語で考えたい科学の問い〈上〉〔文化と社会篇〕』を取り上げ、表6に示すように、各課の読み物におけるカタカナ語の延べ語数・異なり語数を算出している。

表6 上級教科書の読み物：トピックとカタカナ語数

（例：『日本語で考えたい科学の問い〈上〉〔文化と社会篇〕』）

Unit	Lesson	延べ語数	異なり語数	語彙リスト 掲載語数
Unit 1 コミュニティ	1 グループに分かれた争いを人間はいかにしてやめられるか？	194	49	1
	2 「多文化共生」は寛容な社会を作るのか？	117	39	0
	3 人はなぜ「うわさ話」が好きなのか？	118	45	0

5 2022年の小木曾・柏木による口頭発表においても、これに関して言及されている。

6 2024年の『第26回英国日本語教育学会年次大会』におけるポスター発表「上級日本語学習者にとってのカタカナ語学習：教科書のカタカナ語分析から」。

Unit 2 ビジネスと テクノロジー	4	グループ討議はアイデアの生産性を高めるのか?	202	30	0
	5	テクノロジーは思想や文化とは無関係に発展するのか?	211	74	0
	6	人工知能はどこまですごいのか?	193	65	2
Unit 3 スポーツと 芸術	7	スポーツで「地元チーム」が勝ちやすいのはなぜなのか?	280	77	1
	8	芸術はどのようなメカニズムで人の心を動かすのか?	125	41	5
合計			1,440	420	9

2024 年の『第 26 回英国日本語教育学会年次大会』におけるポスター発表「上級日本語学習者にとってのカタカナ語学習：教科書のカタカナ語分析から」の資料に掲載された表に基づく。延べ語数および異なり語数は、当該教科書のアクティビティおよび本文に出現したカタカナ語を対象として算出されたものである。

表 6 のとおり、この教科書の読み物には、全体でカタカナ語が延べ 1,440 語、異なり語数で 420 語出現している。課によって差はあるものの、各課の読み物には 30～77 語のカタカナ語が異なり語数として出現している。一方、語彙リスト等に対訳や説明付きで掲載されているカタカナ語は全体で 9 語にとどまっている。このことから、読解本文中で学習者が会えるカタカナ語の数に比べて、語彙リスト等で明示的に扱われる語は極めて少ないと言える。この点が初級・中級の教科書と大きく異なる。したがって、学習者は上級段階までに、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表 1）に示された①～⑨すべてに対応できる知識やスキル、さらには未習カタカナ語の意味を類推するストラテジーを身につける必要がある。

2024 年の『英国日本語教育学会年次大会』における発表で小木曾は、同教科書の読み物における頻出カタカナ語とその用例も分析している。繰り返し出現するカタカナ語は、「グループ」（84 回）、「アイデア」（76 回）、「アメリカ」（45 回）、「ブレインストーミング」（39 回）、「チーム」（38 回）、「コンピュータ」（24 回）で、初級レベルで学習する語も多い。しかし、上級の特徴は、これらが混種語として現れる点である。「グループ」を例に挙げると、「グループ活動」「グループ対立」「グループ討議」「グループ分け」などの形で出現し、外来語の知識に加え、漢語・和語の知識も必要となる。

また、『日本語で考えたい科学の問い〈上〉〔文化と社会篇〕』では、「ディスカッションする」「プログラミングする」などの動詞化、「サイケデリックな」「リベラルな」などのナ形容詞化に加え、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表 1）には明示されていない副詞化されたカタカナ語も登場する。「ダイナミックに」「リアルに」のほか、「トップダウン的に」「ボトムアップ的に」など混種語も副詞化して出現する。本章第 3 節で示した菅生（2002）は、初級教科書に副詞化されたカタカナ語は見られなかったと報告している。このことから、こうした副詞化されたカタカナ語の出現は、上級教科書の特徴だと考えられる。加えて、同教科書には、「アツい」「ピシッと」など、外来語ではない語をカタカナで表記した例もみられる。さらに、上級では、「コネクションズム」「シンボリズム」などの専門的・学術的内容も扱われるため、出現語も一般的な外来語にとどまらず、抽象的・概念的語彙が増加する。

こうした傾向も踏まえ、2024 年の発表において小木曾は⁷、上級レベルでは、望月（2012）の「カタカナ外来語の学習上の困難点」（表 1）⑥～⑨に該当するカタカナ語の出現率が、初級・中級より高い傾向にあることを指摘している。以上のように、上級教科書では、読解本文中に一定数のカタカナ語が出現する一方で、語彙リスト等で明示的に扱われる語は限られている。また、既習の外来語で

7 2024 年の小木曾によるポスター発表に関しては、注 6 を参照。

あっても、混種語として用いられたり、動詞化・ナ形容詞化された形で現れたりするため、カタカナ語単独の意味がわかるだけでは十分ではない。さらに、専門的・抽象的なカタカナ語や非外来語のカタカナ表記も含まれる。したがって、上級学習者には、多様な外来語への対応力に加え、カタカナ語の語形変化や和語・漢語との組み合わせを理解し、文脈に応じて意味を類推する力が求められる。また、非外来語がカタカナで表記される場合には、その表記の意図や効果にも注意を向ける必要がある。そのためには、和語・漢語を含めた総合的な語彙力が不可欠である。

IV. まとめ：カタカナ語指導に向けた課題と今後の展望

本稿では、日本語教育におけるカタカナ語指導の現状を踏まえ、日本語学習者向けの総合教科書に出現するカタカナ語の傾向を、初級・中級・上級の各レベルで整理し、それぞれのレベルにおける学習上の課題と指導上の留意点を検討した。その結果、学習段階が上がるにつれて、教科書に出現するカタカナ語は形態的にも意味的にも複雑化する一方で、索引不掲載や対訳なしの語も増えることから、学習者にとっての負担が大きくなる傾向が確認された。また、初級段階では「発音のズレ」「縮約語または短縮語」、中級・上級段階では「混種語」「動詞化・ナ形容詞化」「非外来語のカタカナ表記」など、学習者が直面する困難点もレベルによって異なることを示した。

しかし、菅生（2002）も指摘するように、教科書では出現するカタカナ語に十分な説明がなされておらず、学習者その意味や使い方を理解するうえで支援的機能を果たしているとは言い難い。したがって、教科書に依存するだけでなく、カタカナ語の語形成や用法の特徴を補足的に提示し、学習者の語彙習得をどのように支援するかを見直す必要がある。また、教材作成や補助教材の開発など、教育実践の側面からの検討も求められる。

一方、学習者や教師の意識調査（中山他 2008; 陣内 2008）は、当時の日本語教育現場を知るうえで貴重な資料であるが、調査実施から約 20 年が経過しており、カタカナ語の使用状況、英語をはじめとする既習外国語に関する学習者の知識やカタカナ語への意識、教師の指導意識にも変化が生じていると考えられる。したがって、近年の動向を踏まえた大規模な再調査が望まれる。さらに、本稿で取り上げた教科書の一部では改訂版が刊行されており、新旧版の比較を通じた出現傾向の分析も有意義である。

日本語教育では、原語とのずれなど、外来語の学習における干渉要因に焦点が当てられることが多いが、英語教育では、学習促進要因としての側面に注目する研究もあることが報告されている⁸。例えば、同根語の学習促進効果を指摘する Nation（2014）、外来語の知識活用は入門期に効果的だとする相澤・磯（2011）、外来語が存在する英単語のほうが習得が容易だとする Rogers et al.（2015）などが挙げられる。これらの研究は、日本語教育においても、学習者の既存知識を積極的に活用し、外来語の学習を促す指導法を検討するうえで示唆的である。特に、日本語の外来語には英語由来の語が多いことを踏まえると、英語母語話者や英語知識を持つ学習者にとっては、外来語を既存の語彙知識と関連づけて学ぶことが語彙定着に有効であると考えられる。

最後に、本研究は、教科書分析という観点にもとづく予備的考察にとどまるが、カタカナ語の扱い方を通して、日本語教育における語彙指導のあり方を再考する一つの視点を提示するものである。今

8 小木曾は 2023 年『第 25 回英国日本語教育学会年次大会』での阿久津純恵氏との共同ポスター発表「日本語学習者へのカタカナ語指導：日本語教科書における課題と英語教育からの示唆」において、これに関する報告を行った。

後の課題として、カタカナ語を中心とした語彙教育を体系的に位置づけるために、より多くの教科書資料を対象に量的データに基づく出現傾向の把握と、個々の使用例の質的考察を組み合わせた研究を進め、授業実践との接続を図ることを検討したい。

参考文献

- 相澤一美・磯達夫（2011）「小学校4年生教科書及び副読本に使用されているカタカナ英語の分析：効果的な教科連携に向けての調査」『小学校英語教育学会紀要』11号, 37-42頁.
- 阿久津智（2015）「借用をめぐる諸相」沖森卓也・阿久津智編『ことばの借用』第1章, 朝倉書店, 1-32頁.
- 飯田明美（2016）「日本語教育内におけるカタカナ外来語教育の現状と問題点」『武蔵野学院大学研究紀要』13号, 161-169頁.
- 池谷知子・久津本文（2014）「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究（Ⅱ）：習得しやすいカタカナ語と習得しにくいカタカナ語」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究書篇』17号, 27-45頁.
- 稲垣滋子（1991）「初級日本語教科書の外来語」『ICU日本語教育研究センター紀要』1号, 144-154頁.
- 上野山愛弥（2010）「日本語学習者の外来語習得：地域別に見られる習得の傾向」『産業と経済』24巻5号, 1-20頁 奈良産業大学経済経営学会.
- 小木曾左枝子（2023）「カタカナ語学習の観点から見た初級・中級教科書の分析」『Proceedings: The International Symposium on Japanese Language Education: Rediscovering Japan』91-107頁.
- 小木曾左枝子・阿久津純恵（2023）「日本語教育における効果的なカタカナ語指導のための基礎研究」『CAJEL 2023 Proceedings』125-134頁.
- 小野純一（2011）「上級日本語学習者に対する外来語の指導」『中日本自動車短期大学論叢』41号, 97-103頁.
- 金愛蘭（2006）「外来語『トラブル』の基本語化：20世紀後半の新聞記事における」『日本語の研究』2巻2号, 18-33頁.
- （2012a）「日本語の攻防【語彙】日本語の基本語彙に入り込む外来語」『日本語学』31号, 78-91頁.
- （2012b）「外来語の基本語化」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう, 29-45頁.
- （2016）「語彙の周辺部から中心部へ「進出」する外来語：「抽象的な外来語の基本語化」について」『日本語学』35巻7号, 12-22頁.
- （2024）『外来語の基本語化：現代新聞「叙述語彙」への進出』大阪大学出版会.
- 工藤陽子（2001）「日本語教科書の外来語：同志社大学留学生別科で使用した教科書を例として」『同志社大学留学生別科紀要』1号, 47-61頁.
- 国立国語研究所（1984）「日本語教育のための基本語彙調査データ」<<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/bvjsl84/>>（2025年11月3日閲覧）.
- 国立国語研究所「外来語」委員会（2006）「『外来語』言い換え提案—分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫—第1回～第4回総集編」<https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Teian1_4/iikae_teian1_4.pdf>（2025年11月3日閲覧）.
- 塩田雄大（2022a）「外来語は『在来語化』する：外国語は日本語を変えた（のか？）」『日本語学』41巻2号, 116-127頁.

- （2022b）「“外来語の増加に賛成”が6割：2022年「日本語のゆれに関する調査」から（1）」『放送研究と調査』75巻9号，22-39頁。
- 邱俊秋・才田春夫（2019）「中国人日本語学習者の外来語に関する意識と外来語教育の必要性」『富山国際大学現代社会学部紀要』11巻2号，83-92頁。
- 陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11巻，47-60頁。
- 菅生早千江（2002）「初級教科書におけるカタカナ表記に関する一考察：5冊の日本語教科書を比較して」『AJALT 日本語研究誌』1号，111-127頁。
- 田中牧郎・久屋愛美・相澤正夫（2024）「現代日本語における外来語使用実態調査（2023年2月調査）の概要と分析事例」<<https://doi.org/10.15084/0002000287>>（2025年11月3日閲覧）。
- 田中祐輔（2016a）「初級総合教科書から見た語彙シラバス」山内博之（監修）・森篤嗣（編）『ニーズを踏まえた語彙シラバス』第1章，くろしお出版，3-31頁。
- 田中祐輔（2016b）「第1章：初級総合教科書から見た語彙シラバス」『ニーズを踏まえた語彙シラバス』<<https://www.9640.jp/genba/>>（2025年11月3日閲覧）。
- 田島毓堂・金華（2011）「日本語の外来語の増加と中国の日本語教育」『人間文化：愛知学院大学人間文化研究所紀要』26号，169-179頁。
- 陳力衛（2011）「ことばの変遷」沖森卓也・木村義之・田中牧郎・陳力衛・前田直子編『図解 日本語の語彙』三省堂，94-125頁。
- 戸川美恵子（2018）「日本語学習者のカタカナ語彙の習得に関する考察：台湾人日本語学習者への調査を通して」『別府大学日本語教育研究』8号，13-20頁。
- 中山恵利子（2001）「日本語教科書の外来語と新聞の外来語」『日本語教育』109号，90-99頁。
- （2006）『カタカナ教育の基礎的研究—日本語教育における分野の確立を目指して—（科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書概要）』KAKEN（課題番号 17520358）<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-17520358/175203582006kenkyu_seika_hokoku_gaiyo/>（2025年11月3日閲覧）。
- （2012）「日本語学習者の外来語意識：日本語教育における外来語教育を考える」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう，207-223頁。
- （2015）「現代日本語における外来語」沖森卓也・阿久津智編『ことばの借用』朝倉書店，106-144頁。
- 中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子（2008）「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138号，83-91頁。
- 文化庁（2018）「平成29年度「国語に関する世論調査」の結果の概要」<https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/r1393038_01.pdf>（2025年11月3日閲覧）。
- プラワン コンマパット（2023）「日本語教科書におけるカタカナ語の出現率」『日本語教育方法研究会誌』29巻2号，118-119頁。
- 堀切友紀子（2008）「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度：英語学習者の場合」『異文化間教育』9号，4-18頁。
- （2016）「外来語と異文化受容：日本語で『マクドナルド』と言うのは恥ずかしい？」『日本語学』35巻7号，56-65頁。
- 茂木俊伸（2019）「外来語の氾濫と定着」田中牧郎編『現代の語彙：男女平等の時代』朝倉書店，32-42頁。

望月通子 (2012) 「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発：その振り返りと新たな開発に向けて」『関西大学外国語学部紀要』6号, 1-16頁.

山崎由喜代 (2000) 「教材に見る外来語教育に対する意識：日本語教科書の外来語と日本語能力試験出願基準の外来語」『日本語教育方法研究会誌』7巻2号, 30-31頁.

李嘉 (2020) 「中国人日本語学習者のカタカナ認知処理に関する調査研究」『日本語／日本語教育研究』11号, 121-134頁.

Nation, P. 2014. What Do You Need to Know to Learn a Foreign Language? <https://www.wgtn.ac.nz/lals/resources/paul-nations-resources/paul-nations-publications/publications/documents/foreign-language_1125.pdf> (accessed on 3rd Nov. 2025).

Rogers, J., S. Webb, and T. Nakata. 2015. Do the Cognancy Characteristics of Loanwords Make Them More Easily Learned than Noncognates? *Language Teaching Research* 19(1), 9-27.

参考教科書

岡まゆみ・筒井通雄・近藤純子・江森祥子・花井喜朗・石川智 (2009) 『コンテンツとマルチメディアで学ぶ日本語 上級へのとびら』くろしお出版.

岡まゆみ・近藤純子・筒井通雄・森祐太・奥野智子・榊原芳美・曾我部絢香・安田昌江 (2021) 『初級日本語とびらⅠ』くろしお出版.

岡まゆみ・近藤純子・筒井通雄・森祐太・奥野智子・榊原芳美・曾我部絢香・安田昌江 (2022) 『初級日本語とびらⅡ』くろしお出版.

坂本正 (監修) (2019) 安井朱美・井出友里子・土井美有紀・浜田英紀 (著) 『4技能でひろがる中級日本語カルテットⅠ』ジャパントイムズ.

坂本正 (監修) (2020) 安井朱美・井出友里子・土井美有紀・浜田英紀 (著) 『4技能でひろがる中級日本語カルテットⅡ』ジャパントイムズ.

スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語初級Ⅰ』本冊 (第2版), スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク (2013) 『みんなの日本語初級Ⅱ』本冊 (第2版), スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク (2008) 『みんなの日本語中級Ⅰ』本冊, スリーエーネットワーク.

スリーエーネットワーク (2012) 『みんなの日本語中級Ⅱ』本冊, スリーエーネットワーク.

田中祐輔 (編) (2022) 川端祐一郎・牛窪隆太・陳秀茵・張玥・庵功雄・前田直子 (著) 『日本語で考えたい科学の問い〈上〉〔文化と社会篇〕』凡人社.

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2020) 『初級日本語げんきⅠ』(第3版) ジャパントイムズ.

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2020) 『初級日本語げんきⅡ』(第3版) ジャパントイムズ.

マダログイン花岡直美・三浦昭 (2008) 『中級の日本語』(改訂版) ジャパントイムズ.